

コラム

東日本大震災から3年。津波で壊滅的な被害を受けた宮城県石巻市。称法寺は昨年に本堂の修復を終え、このほど門徒組織称親会(66、福島県相馬市)が開いた回目の法話会を開いた。

（36）が中心となって行ふるわが声は、わがこの愛ながら尊からけり」といっている。

さん(57)は、津波で祖母・義母・妹・おいを亡くした。現在、仙台市に住んでいたが、お墓がある称法寺さんに、毎月手を合わせにき境内の墓地を歩けばば



（36）が中心となって行つてゐる。ある松山善洋さん（ふるはとのの雅名を私）の調声で重曹燭をおつとめ。続いて集まつた同寺門徒に委託した。

「震災前は『常例布教』と毎月17日にご法話を聞く会があつたと聞いている。しかし、あの大震災により、寺院活動も混乱の中で先が見えない状況となつた。門徒さん同士の横のつながりを取り戻してもらうために『称親会』が発足した。称法寺の称、親鸞聖人の親で命名した。皆さんで呼びかけた。

布教使の鎌田宗雪さんは法話。京都女子学園の創始者・寺和里さん（78）は「もう少し子さんが詠んだ和歌午後1時、善洋さんの調声で重曹燭をおつとめ。続いて集まつた同寺門徒に委託した。

阿弥陀さまのはたらきが届いていると味わわれた。この災害で死別してつらく悲しい思いをされている方がおられると思う。手を合わせてチンマンダブとお念仏を称えさせていただき、亡くなつた方々が阿弥陀さまのはたらきによって仏となり、私が叫んでいただきたいたい」と語りかけた。

続いて、門信徒会館で茶話会が開かれ、和やかな歓談の時間を楽しんだ（写真上）。

母・義母・妹・おいを亡くした。現在、仙台市に住んでいるが、お墓がある称法寺さんには毎月手を合わせにきていた。法話会の案内をいただき、本堂で初めてお話を聞いた。また法話会に参拝したい」と話していた。

善洋さんは「ご門徒が集つてくださるか不

安だったが、多くの方が参拝してくださりが参拝してくださりの中には、自宅が津波『また来たい』という被害を受け、その土地声を聞き喜んでいる。が復興祈念パレードや防潮堤となってしまい、石をどう復興していく巻を離れて仙台などにか、まだまだわからぬことばかり。「称親にぎやかだった称法寺にぎやかだった称法寺堤となってしまい、石をどう復興していく巻を離れて仙台などにか、まだまだわからぬことばかり」。

会」の皆さんに相談して寺院活動を一つ一つ復旧していきたい」と語った。

△

善洋さんは「ご門徒の行方がわからないと上げられる(同石)墓地の1割が未だ所有者で流された墓石が積み重なっている。境内の墓地を歩けば所見有者を尋ねる案内板が張られた墓石や、津波で流された墓石が積み重なっている。境内の墓地を歩けば所見有者を尋ねる案内板が



東日本大

震

本堂修復し初の法話会

いと思うほど、いい時間だった。本堂でお話を聞く時間は充実している。来ることができなかつた人にも参拝を呼びかけた!』と喜ぶ。

